

第 27 回産業技術センター懇談会 懇談内容

(R 5 . 3 . 7 オンラインと対面の併用開催)

懇談内容

- (1) 令和 3 年度振り返り
- (2) 令和 4 年度活動報告
- (3) 令和 5 年度に向けて
- (4) その他

A 委員

Sier とは？

所長

システムインテグレータの方々のこと。具体的には、製造ライン等を設計・製作している業務を生業としている企業のこと。

B 委員

- ・利用率 17 年連続 1 位の指数が技術職員 1 人当たりとあるが、技術職員は足りているか、また技術職員の負荷が高くなっていないかが心配である。
- ・運営方針で AI や自動化に取り組んでいるとのことだが、事務系だと RPA などだと思うが、センターの事務系の支援事例を紹介してほしい。

所長

- ・人数は増やせないなので、精神的負担を考慮して依頼試験等の数値目標をなくし、目安値として数値を示したが、実数は減少傾向にあるため、何らかの目標値は設定すべきと考える。たとえば、個人に数値目標を課すのではなく、もう少し大きい単位で数値目標を設定するなどを考えている。
- ・RPA について、県全体で Microsoft365 を導入したことで、PowerAutomate や PowerBI が使えるようになった。たとえば、センター内 DB から手作業でのデータ収集・取りまとめ作業を、PowerAutomate での自動化に移行している。また、R5 年度事業に事務系支援を入れている。

C 委員

以前、産業技術センターと共同出願した特許が休眠状態となっている。デジタル化支援力強化として、このような休眠特許を見直し、組み込めば、さらなる発展につながるのではない

か。また当時かなわなかった「リアルタイム」システムなどに、最新の技術を組み込んで新しいシステム開発につなげてもらいたい。

所長

休眠特許については、使えるかどうかを確認する。従来できなかったことが、ディープラーニングでできるようになってきたので、どちらの性能がよいかを見ながら実施したい。

C委員

当該特許に限らず、センターが持つ休眠特許を活用してもらいたい。

所長

センター発明者とも検討する。

D委員

- ・梨の味を分析してブランド化する件について、比較がないと数値化は難しいと思うがどう考えるか。
- ・味だけでなくにおいも大きく関係すると思うので、香りを含めたブランド化がイメージしやすいのではないか。

所長

- ・梨については、他県のものや他の品種との数値比較となる。センターでは味覚センサーの指標で評価している。
- ・醤油や酒は、官能検査により香り等も評価している。

E委員

農業技術センターと産業技術センターで、分野等ですみ分けしているのか、協力関係でやっているのか。

所長

Gアナライズについては、県全体の事業としてやっているの、農業技術センターも入って、手分けして一緒に協力体制でやっている。

E委員

介護関係の技術は、まだマニュアル等なく経験による部分が大きい、産業技術センターの技術からマニュアル化されれば、社会的意義も高いと感じた。

所長

衛生環境研究所が県立病院で産業技術センターの技術を実証するなど、県として協力体制でやっている。

F 委員

課題を顕在化・言語化して対策しないといけないが、そのような人材が必要。機械、箱物をそろえているが、それを動かす人間のボトムアップ・レベルアップする活動が必要ではないか。研修や人材育成を取り入れるといいのでは。

所長

技術支援では、職員が企業へ行き、課題等を調べて対策を行う方法をとっている。デジタルできるものはデジタルで解決する。

人材育成は、職員のレベルアップについては、職員が自主的に勉強会を立ち上げて実施している。また企業さんのレベルアップについては、IoT 人材育成講座や Sier 向け講座、金属積層プリンタ講座等行っている。

F 委員

センターと企業のレベルにギャップがあり、センターの思い描く理想に、企業が追いついておらず、何をすればよいかすら分からない、置いていかれたような状態である。

所長

ここでは紹介していないが、共同研究等における対応としては、工程作業の見直しだけでも改善効果が表れた例などもあり、全てがデジタルソリューションで解決しているわけではなく、あくまでも現場に応じた手法を取っている。ご不安な企業さんには職員が伺い、相談させていただきたい。

G 委員

- ・新コンソーシアム立ち上げなどよいが、広く浅くで特色がないように思う。たとえば、ある分野に特化してはどうか。発表を聞いて、繊維や食品などグローバルニッチの集合体で行くのかと感じたが、それならここに特化した取り組みが必要ではないか。
- ・以前、マーケティングや法的な支援を技術支援と一緒に産業支援機構と連携してパッケージでやってもらった。今後、このニーズは増加するので、このような連携は効果的だと感じる。

所長

様々な業種に対応するため分野は広くしたい。特色としては AI を使うという手法に特化し

て行こうと考えている。流れに乗り遅れないように、うまく使い、また、コストもかからないので、事務系処理なども含めてご支援することを考えている。

H 委員

当方は、産業技術センターに近いことをやっている。可能なら、センター職員と人材交流や交換、情報共有ができるとういと感じた。ニッチな分野の尖ったコンソーシアム立ち上げなども協力できればよいと思う。

所長

是非お願いしたい。

I 委員

- ・オンライン会議で発言者にカメラが向くような機器（オウル(<https://meetingowl.jp/>)のような）があったらよいと感じた。
- ・ハードだけでなくソフト面での支援もあるとのことだが、人材育成講座の知らせなどはどうなっているか。

所長

メルガマや会議・研究会等にて PR している。よければメルマガへの登録をお願いしたい。

E 委員

- ・バイオマス混練樹脂なども、使い終わった後、また廃棄物になるのでは。もう一歩先を考えてほしい。
- ・アンケート調査結果で、回答率 34.7%とのことだが、回答していない人の満足度はどうなのか。回答率を上げるアンケートの取り方など工夫していることはあるか。

所長

- ・使い終わったあとの廃棄物は、引き続きの研究課題である。
- ・以前は、アンケート回収率 25%程度のこともあったが、回答欄を簡単にする等で今のレベルまで上げた。引き続き考えたい。

以上